

みつくら

令和 4年12月15日 第376号
 発行 大瀬川活性化会議
 編集 「みつくら」編集委員会
 花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
 大瀬川振興センター 電話45-6472

“お～い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

文化祭特集

今号では、11月12日から二日間にわたって開催された大瀬川地区文化祭を特集で掲載する。文化祭実行委員会（熊谷秀夫委員長、委員14名）では開催前日に会場準備、終了後に会場の撤去を行った。また、初日には世代間交流事業「IMOらぼ」で収穫したサツマイモを菅原教雄さん、熊谷恭一さんが焼き芋にして参観者に振る舞った。

体育部門

用具の購入を機会にポッチャの講習

12月1日号でも写真付きで掲載したが、今号ではもう少し詳しくお知らせしたい。文化祭のスポーツ部門として11月12日、大瀬川構造改善センターで18名が参加してポッチャ講習会が開かれた。ポッチャとは、ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツで、東京パラリンピックの正式種目でもあった。赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、ジャックボールという目標球の白いボールに、いかに近づけるかを競うもの。講師は前町体育協会長の永井紳逸さんで、講習では、最初に用具の説明があり、続いて実技を学んだ。最初は各自でボールの試し投げを何回かした後に、3人が1組になって対抗戦を1時間ほど行った。

参加者の中には、初めてポッチャを体験した人も多かったが、やってみると思いのほか楽しいものだった。市老連石鳥谷支部では現在、11月から2月にかけて19クラブの総当たり戦のポッチャ大会を開催中で、大瀬川の3チームが活躍している。

舞台部門

コロナ禍の為に中止していた大瀬川文化祭の舞台部門は、3年振りに再開した。熊谷秀夫実行委員長は「文化祭の舞台部門は、当大瀬川だ

けなので考慮しましたが、大瀬川の人口が年々減少する中で活性化の為に、感染に注意しながら開く事にしました。市に合併した時の大瀬川の人口は850人でしたが、現在は620人と230人（27%）も減少しています。このような中で協力して下さいました皆さんに感謝しています」と挨拶した。

舞台部門の司会は熊谷恭一副実行委員長が、また音響は板垣公さんが担当した。委員長挨拶のとおり町内の文化祭で舞台部門を設けたのは大瀬川だけで、とかく自粛の世相だけに、日常に華やかさを添えたひと時であった。

舞台上で少年消防クラブの表彰を伝達

舞台発表に先立ち、岩手県幼少年婦人防火委員会（下山修治会長）から大瀬川少年消防クラブが表彰され、その伝達式がこの舞台上で行われた。伝達は、小原敏裕花巻消防本部予防課長から、クラブを代表して玉山太一さん（パーマ屋）に表彰状と記念品の盾が渡された。その様子は岩手日日新聞に掲載され、消防本部から運ばれたフィードバック（表彰式や会見などで使用する後ろの格子様板）の前に立った受賞の写真は映えていた。

権現舞を披露

舞台部門の最初を飾ったのは、大瀬川神楽保存会（畠山絹雄会長）の権現舞であった。舞手は権現様を藤原美輝さん、シコトリ（尻尾取り）は熊谷雅人さん、ヨネアゲ（読み上げ）は熊谷茂さんの3人。この舞いに合わせて笛は畠山絹雄さん、太鼓の熊谷美奈子さん、鉦の板垣由三さんが「ちんちん びーひゃら どんどん」と権現舞を披露した。いつ見ても権現様に御神酒を捧げる仕草は上手いものだと見入った権現舞だった。

3年振りの大型紙芝居

大瀬川民話クラブ（板垣公部長）は、3年振りに大型紙芝居3作を披露した。同クラブは、コロナ前には毎年千鳥苑や石鳥谷小学校の授業で披露していたが、コロナ禍で暫く休んでいた。今回のこの舞台では1作目に「おんぶしたい殿」で語り部は菅原千恵子さん、2作目は「らんこ姉妹」で語り部は菅原佳子さん、3作目は「きつねの仕返し」で語り部は菅原敬子さんの大瀬川弁で語られた。それぞれの「めぐり」は語り部以外のお二人が担当した。

熊谷さんは2話を朗読

壇上で熊谷敏江さんは2話を朗読した。最初に披露した「地獄」では、主人公がさまざまな地獄を体験し、閻魔大王の裁きの前に、かつて行なった小さな善行からお地藏様によって救われ「命の大切さ」を語るものであった。次は谷川俊太郎作「平和と戦争」の絵本で、紙芝居風に絵を見せながらの朗読であった。「平和」と「戦争」の「違い」を同じ人や物や場所を見開きページ毎に比較したもの。しかし最後のページは違いの無い「みかたのあかちゃん」と「てきのあかちゃん」。子供向けではあったが、大人が聞いても考えさせられる物語であった。

熊谷さんの踊りは2曲

熊谷秀夫さんは、和服姿で2曲の踊りを披露した。初めの1曲は「きよしのズンドコ節」で、2曲目も氷川きよしの「白雲の城」を披露して、やんやの喝采を浴びた。熊谷さんは奥さんの満子さんと共に踊りを習っていて、前回の文化祭にはご夫婦で披露されたが、今回はお一人だった。

展示部門

2日間の展示を終えて、実行委員会や出展者が作品を撤収したが、その時に熊谷秀夫実行委員長は「今年の展示は昨年比で20%程出展数が多く、皆さんのご協力に感謝しております」と挨拶をされた。当紙では、出展された方々への謝意も込めて全作品を紹介したい。

2歳の幼児も習字を出展

たまげた、たまげた。熊谷和紀さんのお孫さんで2歳の米澤登仁（とうじ）さんが、自筆の習字「オキドキ」を出展した。書道額に納められたこの作品はお母さんの笑香さんの書道を真似て書いたもの。長四郎家の熊谷静香さんと米澤笑香さん姉妹は揃って書道家なので登仁さんの将来が楽しみだ。

保育園児は図画5点

石鳥谷保育園からは5名の図画が展示された。菅原眸玖さん（むく、野中家）の題は「おねえちゃんとむしとり」、菅原萌愛さん（めい、野中家）は「みんなでのんびりおひるね」、菅原時生さん（ときお、赤坂家）の題は「なかよくたべろ」、熊谷優利さん（ゆり、越田家）の題は「むしさんいっぱい」、畠山楓さん（かえで、下西海地家）の題は「みんなでおいかけっこ」で、それぞれの絵の前で、観る人からは笑顔がこぼれていた。

小学生の図画は15人が展示

出品された図画の題名は、畠山ひよ里さん（六盃家）と西館椿稀さん（西館家）、玉山太一さん（パーマ屋）の3人は「私の大切な風景」、菅原仁さん（治郎助家）は「初めて人參の皮むき」、菅原新さん（赤坂家）は「ウォータースライダー」、板垣維吹さん（いぶき、高田竈家）は「四季」、菅原煌太さん（大工戸家）は「就学旅行新聞」、辻村大雅さん（久助家）は「面白かったキャンプでの夜」、板垣龍さん（たばこ屋）は「丸い花」、板垣陽翔さん（はると、高田竈家）と板垣美月さん（たばこ屋）は「屋根の上の猫」、畠山拓磨さん（下西海地家）は「虫取り」、熊谷ひなたさん（牛房家）は「夏休みの思い出」、熊谷陽麻梨さん（ひまり 萬之助竈家）は「レストランで食事」、熊谷光さん（こう、木ノ宮家）は「楽しい虫取り」であった。

現在、大瀬川の小学生は1年生が6人、2年生が5人、3年生が3人、4年生が2人、5年生が2人、6年生が4人で合わせて22人が学んでいる。

みつくら

令和 4年12月15日 第376号
 発行 大瀬川活性化会議
 編集 「みつくら」編集委員会
 花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
 大瀬川振興センター 電話45-6472

“お〜い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

展示部門続き

小学生の習字は6点

小学生の習字は6人が出展した。その方々は辻村藍さん(久助家)、菅原万夢さん(まゆ、野中家)、熊谷心々さん(ここ、田屋家)、福島詩太さん(うた、福島家)、菅原未結さん(野中家)、熊谷水希さん(牛房家)達が上手に筆を運んだ作品であった。

「子供写真展」に児童から多くの写真

今回の文化祭の中でも注目を集めたのは、初めて大瀬川子供育成会(菅原一禎会長)の協力を得て、児童達から多くの写真が出展されたことだった。参観者達はこの児童達が撮影した写真に注目していた。また、写真のタイトルも大人には考えつかないユニークなものだった。マンネリ化を防ぐためにも、このような企画を大切にしたいもの。

以下は50音順。板垣維吹さん(高田竈家)は「稚魚放流」、板垣陽翔さん(はると、高田竈家)は「愛猫」、板垣美月さん(たばこ屋)は「皆が集まる改善センター」と「大瀬川の景色」の2点、板垣龍さん(たばこ屋)は「大瀬川の田んぼ」と「宮澤賢治の看板」の2点、辻村大雅さん(久助家)は「今年のたろし滝と僕」、熊谷心々さん(田屋家)は「みづき団子に集合」と「田んぼでダッシュ」の2点、熊谷ひなたさん(牛房家)は「花のニコちゃん」と「妹ができたよ」更に「お姉ちゃん」の3点、熊谷水希さん(牛房家)は「ぼく」、熊谷陽麻梨さんは「二階の窓から1」と「二階の窓から2」の2点、菅原新さん(赤坂家)は「シールコレクション」と「パーベキュー」、更に「大好きなりんご」の3点、菅原煌太さん(大工戸家)は「一ノ留橋」、玉山太一さん(パーマ屋)は「ある秋の日」、西舘椿稀さん(西舘家)は「葛丸ダムと愛犬ロキ」、畠山拓磨さん(下西海地家)は「りんごぼうや」と「かまきりの卵」の2点、畠山ひよ里さん(六盃家)は「秋の夕焼け」2点と「秋の夕暮れ」の3点が展示された。大瀬川子供育成会からの展示は合わせて26点の写真であった。

中学生からは粘土細工

大瀬川の中学生6人からは、粘土細工が出展された。板垣蒼幸さん(北畑家)は「鯨」、熊谷音々さん(田屋家)は「熊」、菅原氷織さん(向竈家)は「亀」、高橋咲季さん(新田家)は「猫」、畠山真莉華(さん前畑家)は「鯨」、畠山港人さん(惣助家)は「鷹」の作品であった。

中学生の絵画は14点が出展

大瀬川の中学生からの絵画出展は、板垣蒼幸さん(北畑家)、板垣涼花さん(甘木竈家)、熊谷光哉さん(善助家)、熊谷朋久さん(向田家)、熊谷音々さん(田屋家)、菅原颯人さん(大工戸家)、菅原氷織さん(向竈家)、菅原陸さん(治郎助家)、菅原瑠香さん(新山家)、高橋咲季さん(新田家)、高橋瑞希さん(新田家)、玉山優奈さん(パーマ屋)、西舘柚葉さん(西舘家)、畠山港人さん(惣助家)達の作品で、何れも近所の中学生とあって鑑賞者は生徒の家号も尋ね合っていた。

ブルリの杜からは絵画など17点が出展

生活介護施設・ブルリの杜(熊谷和彦代表理事)からも毎年作品の出展協力があり、今年の大瀬川文化祭にも「縫いぐるみ」2点、「絵画」13点、紙細工1点、織物1点の合わせて17点の作品が出展された。このような協力に実行委員会も感謝していた。織物展示の脇に「織物などの製品を販売しています」と表示があった。ブルリの杜の利用者にとって、社会参加や自立の促進につながることから、地区民としてもそれらの製品を購入して協力したいものである。

千鳥苑からも多くの作品が展示

今年文化祭にも千鳥苑から多くの作品が展示された。特に目を惹いたのは、八重樫守さんと八重樫典子さんご夫妻の作品であった。八重樫さん夫妻は1年前に東和町から入所された方で、ご主人の作品は絵画の「雪の中の中尊寺」、「栗」、「秋」、「山里の農家」、「ぼら」の5点。また奥さんの八重樫典子さんの作品は、短冊に書かれた自作の短歌2首と絵手紙の「かきつばた」、「花瓶」、「冬至日」、「落葉」の4作品で、他にも手芸としてパッチワークのバックやステンドグラスギルト4点、布絵の「柿」と「獅子舞」が展示されて八重樫さん夫妻の趣味の奥深さが感じられた。千鳥苑の他の方々では、阿蘇あき子さんは、押し絵で「うさぎ」、高橋敦子さんは編み物で作った「炬燵カバー」、多田カネさんは、折り紙4点、伊藤きよ子さんも折り紙4点と漆塗りの瓢箪(ひょうたん)2点であった。この瓢箪には参観者が「プロ並み」と感心していた。千鳥苑では入所者の他に、職員一同として「プーさん空の散歩」の大作のほか、12点を作って千鳥苑コーナーを賑わせていただいた。

千鳥苑でもコロナ禍のために、多くの行事を中止せざるを得ないこの折に、これほどの協力に感謝したい。

書道掛け軸ではお二人が出展

掛け軸に書かれた書道は、熊谷青翠(本名熊谷美奈子)さんの「両岸揚花風作雪」と熊谷静香さんの臨書「蜀素帖」の2点が展示された。熊谷青翠さんと熊谷静香さんのお二人は、何れも石鳥谷書道会の会員で市民芸術祭などに数多く出展している。

2団体の表彰状も展示披露

みつくら当号の舞台部門で紹介した、大瀬川少年消防クラブが岩手県幼少年婦人防火委員会から表彰された賞状と記念品の盾も、伝達式の後に展示部門で展示披露した。また、今年の6月に環境大臣表彰を受けられた大瀬川たろし滝測定保存会の賞状と、それらを報じた新聞や表彰式の写真、今年のためし滝測定会の資料など8点も展示披露した。

置物は「鹿の角」と「電気スタンド」

展示された置物の中で、特に眼が留まった物に畠山幸夫さん(萬蔵竈家)が出展したニホンジカの角一対であった。自宅近くの新山(しんざん)で見つけたもので、その角一対が畠山さんが台座に据え付けたもの。ニホンジカは雌には角が無く、雄のみに生えるそうだが、毎年春になると角が生え替わるので、その角だと思われる。春に生え替わった角は、年齢に応じて急速に伸びて夏までには立派な角になるという。どうりで、角がない大きな体格のニホンジカに出くわすことがあるが、ちょうど生え替わったばかりだったかも知れない。因みにニホンジカは奈良公園などに見る茶色の毛だが、ニホンカモシカは、鼠色をした毛色である。

ほかに置物では、高橋厚子さんがおしゃれな電気スタンドの手芸を出展した。

お金のお札を表したジグソーパズル

ジグソーパズルではあったが、熊谷レイ子さんが出展したお札(日本銀行券)も見応えがあった。それぞれ(50銭以下は省略)図案が違って、1円札は昭和15年発行の鳳凰と、昭和18年発行の武内宿禰、更に昭和21年発行の二宮尊徳の3種類。5円札は昭和5年発行の菅原道真。10円札は昭和18年発行の和気清麻呂と昭和21年発行の国会議事堂の2種類、50円札は、昭和26年発行の高橋是清。100円札は、昭和21年発行の聖徳太子と昭和28年発行の板垣退助の2種類。500円札は昭和26年発行の岩倉具視(左側に500の文字あり)と昭和44年発行の岩倉具視(左側が空白)の2種類。1000円札は、昭和25年発行の聖徳太子と昭和38年発行の伊藤博文、更に平成16年発行の野口英世の3種類。2000円札は平成12年発行の守礼門。5000円札は昭和32年発行の聖徳太子と平成16年発行の樋口一葉の2種類。10000円札は、昭和33年発行の聖徳太子と平成16年発行の福沢諭吉の2種類など全部(50銭札を含む)で34種類のお札を表していた。

みつくら

令和 4年12月15日 第376号
 発行 大瀬川活性化会議
 編集 「みつくら」編集委員会
 花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
 大瀬川振興センター 電話45-6472

“お～い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

展示部門続き

来年の干支を出展

来年は卯年。それに因んで11月に大瀬川活性化会議主催の「干支づくり教室」で受講した方々の「うさぎ」13点が展示された。作者は分からなかったが、「うさぎ」をひっくり返して見たなら、足の裏に名があった。作者は板垣江利子さん、板垣幸子さん、板垣早也香さん(松木田家)、板垣福子さん、熊谷敏江さん、熊谷るり子さん、熊谷レイ子さん、菅原房子さん、菅原美佐子さん、高橋厚子さん、高橋サト子さん、畠山久子さん、畠山莉奈さん(萬藏竈家)の作品と分かった。座ったり、立ち上がったり表情もさまざまな「うさぎ」たちであった。

去年より多かった手芸品の出展

何と言っても文化祭の「華」は美しく飾られて展示している手芸品である(と筆者だけが思う)。別記の「干支」、「ジグソーパズル」、更に「各福祉施設」からも多くの手芸品の出展があったが、それ以外の手芸品を紹介したい。
 まず、最も多く出展頂いた大瀬川手芸クラブ(菅原重子会長)からは、作者の名は付けずに帽子は7点、布製手提げバッグが9点、籠製の手提げバッグが5点、壁掛けが8点、紙のクラフトが6点、刺し子が18点、布製小物入れが10点、紙製小物入れが17点の協力を頂いた。手芸クラブ以外では、板垣久美さんが和服の帯で作ったテーブルランナーの8点と菓子入れ4点、熊谷満子さんは手提げバックとテーブルランナーの2点、菅原サツ子さんはベスト、菅原慶子さんはポーチの財布、ミニバッグ、タペストリー(風景、人物などの絵模様を織り出した綴織)など6点の出展であった。

写真は14名から38点

写真の出展では板垣幸寿さん(以下50音順)の「白川郷」と「毛越寺の紅葉」、更に「座禅草」の3点、板垣弘清さんは「葛丸湖の晩秋」と「初夏の一ノ滝」の2点、板垣皆美さん(山羊屋家)は「のんびりと仲良く猫散歩」と「必殺

猫パンチ」、更に「狩りに行きたいけど寒い」の3点、伊藤眞貴子さんは「内股一本」と「打ち切る出し切る」の2点、熊谷善志さんは「石神の丘美術館の紅葉」、熊谷敏江さんは「月下の戦い」と「収穫の秋1、2」、「秋終い」、他に「夕映え」の5点、菅原茂子さんは「冬の夜明け」、菅原新一郎さんは「サンピエトロ大聖堂」と「滅び行く街チヴィタ」、更に「ポンペイ遺跡1」と「ポンペイ遺跡2」、「ポンペイ遺跡3」の5点、菅原得之さんは「陽傘」、菅原昇さんは「葛丸ダム」と「葛丸の紅葉」、更に「葛丸川」の3点、菅原教雄さんは「イケメン」と「早苗」の2点、板垣美樹さん(甘木家)は「ベンチ」と「桜」、更に「秋」の3点、菅原房子さんは「秋の夜明け」と「冬の夜明け」、更に「雨上がり」の3点、辻村睦さんは「雪の羽黒山・五重塔」と「法体の滝1」、「法体の滝2」、「立佞武多(たちねぶた)」の4点であった。

文化祭の写真部門は、今までは風景写真が多かったが、今回は多彩な視点から撮られた作品が多く、多くの方々を魅了していた。

当号の紙面について

今号の紙面は特集記事ですので、訃報以外の記事は1月号に掲載します。

訃報

○與五郎家の板垣與治さんは、11月10日に84歳で亡くなりました。板垣さんで思い出すのは、若い頃に山影万治(森子竈家)さんと一緒に、2台の耕耘機で田打ちや田掻きを請われて一世を風靡したことでした。板垣勘一(森子竈家)さんは、昭和35年に大瀬川で2番目に早く耕耘機を買った方で、それも同時に2台を購入し、それまでの馬での農作業を機械に替えた時代のはしりを担いました。あまりの忙しさに、朝食時も昼食時も板垣與治さん、板垣万治(当時)さん、板垣勘一さんの3人が交代で2台の耕耘機を使いフル回転で働いたものでした。

板垣さんは、他に消防での活躍も思い出します。27歳の時に第1回県消防ポンプ操法が始まりましたが、その時に大瀬川の第2分団第1部が石鳥谷町の代表として選手で出場し、見事に5位入賞した選手でした。その後、大瀬川ではこの記録を破ったのは見当たりません。板垣さんは農業の傍ら、定年まで花巻営林署の職員でしたので、大瀬川の方々も大変御世話になりました。過去の経歴を見ましても、若い頃には石鳥谷町青年団体連合会の監事や花巻地方農業共済組合の共済部長、山海土地改良区の水門監視人、また、第8区行政区長や大北地区農業集落排水施設維持管理組合長など多くの役職で地域に貢献されました板垣さんに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

○留屋敷家の菅原和子さんは、11月11日に83歳で亡くなりました。菅原さんは紫波町土館の出身で、留屋敷家に嫁がれてから数多くの役職で地域に貢献された方でした。大瀬川若

妻会長に始まり、続いて石鳥谷町新総合開発計画構想大瀬川地区町づくり計画推進委員や石鳥谷町農協婦人部副部長、大瀬川婦人協議会婦人部長を担われていた時にご主人(菅原俊男さん)を亡くされました。そのとき、菅原さんは46歳の若さでした。その後も農業の傍ら秋柴重機に定年まで勤められ、その間にも岩手婦人の船の研修生として選ばれて参加し、他にも石鳥谷町保健推進員、大瀬川社会福祉推進協議会長、たんぼぼの会長、更に石鳥谷町更生保護女性の会大瀬川地区理事長などで、地区の方々から親しまれた方でした。喪主の挨拶で、娘の小倉美和子さんは「入院してもコロナ禍で母には会えず、母からも家に帰りたいと何度も言われました。家で看取りたいと願ひ出て、やっと退院の日が決まり、安堵していた矢先、その退院の前日に逝ってしまいました」と残念だった心境を話されました。地区民が御世話になりました菅原さんに対し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

○田屋竈家(通称藤助家)の熊谷芳さんは、11月20日・90歳で亡くなりました。

熊谷さんは大迫町亀ヶ森の出身で、ご主人の熊谷清一さんは30年間も酒屋働きに出ていましたので、春先の農作業も女手一つで働かれた方でした。「たんぼぼの会」を始め、9区の集まりには殆ど参加し、話題も豊富で皆から親しまれた方でした。そのたんぼぼの会も、この3年間はコロナ禍で会合は少なくなりましたが、熊谷さんの明るい笑顔を思い出します。「若い頃は洋裁が趣味で色々な服を作って楽しんでいました」とたんぼぼの会の会員から聞いた事もあります。遠慮がちな方でしたから、あまり地区の役職は担いませんでしたが、大瀬川公民館の記録に「平成2年度石鳥谷町保健推進員」を担っていることが分かりました。誰にでも、笑顔で話しかけて下さった熊谷さんに対し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

○畑中家の菅原愛子さんは、11月25日に90歳で亡くなりました。菅原さんは青森県弘前市の出身で、ご主人が二北酒造店(桃川)で酒屋働きの時に知り合い、畑中家に嫁がれました。菅原さんは、嫁がれてから6年後(昭和42年)に大瀬川さんさ踊りが復活(保存会の設立はその後の昭和52年)した最初からの踊り手でした。そのさんさ踊りで三陸海の博覧会に当時の会長であった菅原四郎さん達と出演したのを思い出します。菅原さんは婦人消防協力隊でも功績を残していて、大瀬川婦人消防協力隊長や石鳥谷町婦人消防協力隊第2分団長を担いました。他にも石鳥谷町保健補導員や大瀬川婦人団体協議会教養部長など多くの役職を勤められた方でもありました。菅原さんは、やはり酒屋に縁があったのでしょうか、平成初期には兵庫県と茨城県の酒造店に「賄い婦」として5年間働かれたことも記憶に残ります。ご主人を亡くされてから35年間、お一人で過ごされ頑張ってこられました菅原さんに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。